

## Uriah Heep について

篠 田 昭 夫

Uriah Heep という人物は端的に表現すれば、ナルシズムに耽溺し切ったが故に、身の破滅を誘発する羽目に陥った、と言えよう。「ナルシズム」は過度の自我愛を一大特徴とし、例えばヒットラーにおけるが如く、そのエネルギーの強度が極度に増幅されて来ると、屢々、狂信的・破壊的傾向を持つ熱情であるが、Uriah Heep も例外ではなかった。今更述べる迄もなく彼は Charles Dickens の自伝的長篇 *David Copperfield* において、悪役の典型像という有難くない役廻りを担わさせられている人物なのであるが、彼の場合にも、偏狭なナルシストという蜘蛛の巣に彼を逃れる術なく追込んで、それでもって彼を雁字搦めに呪縛してしまった環境的要因を見逃してはなるまい。

彼が育った境遇が如何なるものであったか、彼が語る言葉に耳を傾けてみよう。

‘Father and me was brought up at a foundation school for boys; and mother, she was likewise brought up at a public, sort of charitable, establishment. They taught us all a deal of umbleness—not much else that I know of, from morning to night. We was to be umble to this person, and umble to that; and to pull off our caps here, and to make bows there; and always to know our place, and abase ourselves before our betters. And we had such a lot of betters’ (ch.xxxlx)

通学したのは慈善学校の如きもの。教えられた事といったら、自分の身分を弁えて誰に対しても四六時中腰を低くして居なさい、という訓導のみ。これでは、全く惨々たる境遇であった、としか言い様もないが、かような相を更に一層深化させたのが、他ならぬ彼の両親である。上の引用文中に見られるように、ユライアの両親自体が他人のお情で教育を受け得た、という惨めな境遇だったのである。しかも、父親というのが世間に対して極力慎ましやかな態度を執った、という事の上首尾の帰結として、彼は級長のメダル (monitor-medal) を授与されたし、学校を卒業して社会へ出た時には、寺男という仕事に有附く事が出来たのだ。だから、彼等が自分達の息子に彼の人生信条として ‘Be umble, and you’ll get on’ (ibid) という事を叩込み、Uriah がそれを忠実に継承したとしても、何ら不可思議な話ではない訳である。とは言え、彼の両親のそうした卑屈な態度が先述したように、彼を包む環境が醸し出すただでさえ暗い色調を更により暗く、窒息しそうなものに変質してしまったのは明らかであり、呼吸も満足に出来難い状況の中で生立ち、成長して来た人間が、表面上は処世術として如何に巧妙に謙虚な風を装って居たとしても、彼の胸中には抗社会的情念が間断無く噴上っている。という事も又、明らかである。

だが、Uriah Heep の対人態度は、比類のない位腰の低いものではある。詰まり、強い自制力で憎念の類を抑圧して意識の深奥にどうか閉込め得ているのである。尤も、彼がそうせざるを得ない事情も厳然と存在している訳で、第一には、当然彼の困窮を極めた生立ちが浮かび上って来るし、それから、既に触れた両親の生活体験より滲み出てきた教えに深く影響された、という事もあるのであるが、何にも増して見落せないのは、彼の父親が彼の10才の時に他界してしまった、という事実であろう。元々が下層の生活を余儀なくされている所に、凭掛かれる筈の父親

## Uriah Heep について

という大黒柱が吹飛んでしまっ、早くより自力で自分と母親との糊口を凌がねばならぬ、という極限的狀態に追込まれてしまったのであるから、否応無しに、生抜いて行く為には可能な限り腰を低くして、自我意識を抹殺せざるを得なくなった訳なのである。彼のかような、甚だしく謙遜した言動は、生きる智慧として本能が彼に要請したものであり、それ故、彼としては必然的にこれに固着し続けたのでもある。

しかしながら、彼は自分の置かれた運命を諦めに似た気持で甘受するような温順な気質には、生まれついていなかったようである。それは彼の並はずれて執拗に過ぎる低頭の姿勢に、何よりも先ず顕著に露呈されている、と言えようか。ともかくも、口を開けば必ず 'I am a very umble person', 'Umbler as I am……' なる言辭が口を衝いて出る有様なのであるから (お陰で、こうした言葉は彼のライト・モチーフになってしまった)、慎しみ深さも程度問題だという事になる。さりながら、これだけで収まって居たのなら、他人に不快感を及ぼした程度で、Uriah の一生も多くは望めなかったにせよ、そう大した波乱もなく平穩に進展して行った事であろう。が、彼の慎しみ深さ、腰の低さはこうした生優しい性質のものとは似ても似つかぬものだったのである。例えば、それは次の引用文よりありありと感受されよう。

As he held the door open with his hand, Uriah looked at me, and looked at Agnes, and looked at the dishes, looked at the plates, and looked at every object in the room, I thought,—yet seemed to look at nothing; he made such an appearance all the while of keeping his red eyes dutifully on his master. (ch. XVI)

これは本篇の主人公 David Copperfield が学校に通学する便を計って、Uriah の雇主に当たる Mr. Wickfield の家に寄宿し始めた頃の或る晩の一コマであるが、極めて印象深い場面である。Uriah の身分では、彼の主人父娘と食事を共にする事は到底現実化しそうなもないだけに、尚更そうなのであり、表面上は然り気無く謙虚な風を装ってはいても、彼の内に抑えられて燻っている激情は、発露点を両眼に見出したのであろうか、'red eyes' という表現に、彼の濃縮され、凝集されて熱風を孕んで渦巻いている情念を覗き見る思いがする。

彼の本性が自ら露呈している眼に言及したので、話の順序として、風貌全体をも引合いに出すべきであるが、これが又如何に酌量してみた所で、どうにも好感がもてるものではない。眉も睫も全然無く、死人のように蒼褪めた (cadaverous) 顔色を湛えているのに、剥出しの両眼と密集した切株みみたいな髪とは赤い、というのであるから、顔だけを取り出して、薄気味悪くて、鳥肌が立つようである。体軀はというと、上背はあるけれども全然肉が付いていない骨々した、早く言えば骸骨のような感じなのであって、当然、四肢ばかりがやけに長く見えるという訳だ。亦、手の感触と来たら、形状も魚に似ているが、魚同様ぞっとする程ぬるぬる (clammy) しているというし、おまけに、彼にはそうした手で顎を撫廻す癖があるのだ。だが、これらの要素だけで仰天するのは早過ぎる。Uriah の顔には笑いの明確な表情は浮かんでこなくて、唯、口が開いて両頬に趨が刻まれるだけなのであり、細く尖っている鼻翼は次のような運動を行なう。

—I observed that his nostrils, which were thin and pointed, with sharp dints in them, had a singular and most uncomfortable way of expanding and contracting themselves; that they seemed to twinkle instead of his eyes, which hardly ever twinkled at all. (ibid.)

ここ迄来ると、よくもこうまでに *Uriah* を気味の悪い存在物に創りあげたものだ、と感服したくなるが、それにしても、堪え難い程の恐怖感と嫌悪感をそそる人物である事は、否定すべくもない。そして、彼には感情が少しでも高潮してくると、言葉に合わせて全身をくねらす(*writhe*) 習性がある、という事を上積みすると、彼を包摂する「不気味さと嫌らしさ」の図柄は完璧なものになるのである。以上で、彼の外観と習性に関する説明は大要を尽くした、と思うのだが、集約的に言うなら、彼は、何処から眺めても、人に好感、快感を与えるような人間では全然なく、否、それどころか、「人間にして人間に非ず」といった感さえ抱かせる、と言いたい位である。

彼の実に特徴的・個性的風貌で他の何物よりも顕現化しているのは、生気が全く認められない、という事である。その蒼褪めた顔色。極度に肉が削げ落ちた瘦身。これらのものが、生きた人間の肉体的条件に当該する筈はなく、紛れもなく、死人のものなのである。詰まり、*Uriah Heep* は死の臭いを濃厚に発散させているのである。こうした外貌と対蹠的であるのが、彼の心理模様であり、先述したように、これが外界へ奔出して、一点に凝結されて形成されたのが、彼の両眼に見られる赤さ、であるように思われる。

このような観点に立脚するならば、*Uriah Heep* なる人物が常に激しい自己愛に燃えて、自己中心的にのみ動くタイプの人間、即ち、「ナルシスト」としての資格は十二分に具備している事が指摘出来よう。

このような型の典型像と言え、実例を挙げるなら、例えばヒットラーであり、アイーヒマンであろうが、彼等の風貌の際立った特徴については今更述べる迄もあるまいが、双眸の残忍さを秘めた異常な輝きと、墓場より迷い出た亡者の如き無表情で蒼白な相貌とに求められよう。上記の事項に照合すると、*Uriah Heep* の風貌が彼等のそれに酷似している事、換言すれば、「ナルシスト」に属する人物であるのは、歴然としてくるであろう。

ところで、「ナルシスト」は自分自身の事しか念頭に置いていないのであるから、彼に何らかの形で関与した人間達を、彼は激烈に且つ執拗に敵視する心理傾斜をもっている。徹底的に敵として取扱って、彼等を破壊する事によって、自己の保全、栄達を計ろうというのである。従って、行使し得る限りの権力と精力を投入して、心的にも行動的にも、邪魔者(と彼が見做す)を粉砕してしまおうと彼はするであろう。言換えれば、こうした態度は対象を極力形骸視するものとも言えよう。相手が生命力に溢れていては圧殺するのが困難であるが故に、いっそ生命の消滅した抜け殻である方が好都合なのである。しかし、現実の人間社会ではそんな事は有得ないから、その代償として、意識するしないに拘らず、精神面に周囲の人物群を形骸視する、という姿勢が彼の内に形成されるのである。詰まり、こういう作業は彼の生存にとっては不可欠のものなのである。比喩的に言うなら、彼は彼の内部に葬められている死人と共生しているのであり、彼の血の気の失せた顔付きも、蓋し起こるべくして起こった現象といえようか。そうして、かような精神姿勢が外界へ投射された場合は、形骸に近い虚弱な人間が先ず槍玉に挙がる事になるのであって、当然のことながら、*Uriah Heep* の場合にもこの事ははっきりと現出している。

極端な自我愛に陥った人間の通例として、*Uriah* の交際範囲は極小で、彼と多少でも交わりを結んだ人物群は、精々 5, 6 人を数えるに過ぎない。この中で最も接触があったのは彼の主人にあたる *Wickfield* 弁護士とその娘 *Agnes* であるが、彼等は完全に彼の薬籠中の物に変身させられるような柔弱な存在に過ぎない。父親の方は、彼との結婚を親に頑として承認してもらえない為に精神的深傷を負ったのがもととなって、遂には生まれたばかりの *Agnes* と夫とを残して無残にも散ってしまった妻の影にいつも重く申し掛られていて、この余りにも苦くて到底咀嚼し切れぬ記憶から逃れる方法を、よくあるように、酒を呻る事と忘れ形見たる娘を溺愛する事に求

## Uriah Heep について

めているような人物である。一方娘 Agnes は、これが又愛情と思い遣りとの権化そのものと称して良いような、所謂「愛は惜しみなく与う」型の女性なのである。

……Agnes, my sweet sister, as I call her in my thoughts, my counsellor and friend, the better angel of the lives of all who come within her calm good, self-denying influence,……(ch. XVIII)

かような人間味が殆ど脱落してしまっていて形骸化している彼等では、Uriah の感化力に犯されるな、と言うのが、土台無理な注文というものである。彼の人生目的は、それ故、次第に現実化への過程を着実に辿っていったのである。彼の人生目的とは言う迄も無く、生まれ落ちた瞬間から彼をして散々卑屈さと苦痛とに喘がせて来た惨めな境遇から脱出する事に他ならない。そして、これを実現する為の足掛りを、彼は書記という一介の労働者から、Mr. Wickfield の共同経営者 (partner) という紳士階層の一成員に立身する行為の達成に置いた。亦、同時に、否それ以上に、彼の栄達を光輝あるものにする為に、淑女の理想像 Agnes の獲得に彼は総力を結集したのである。それと言うのも、身分的には幾ら上昇し得ても、彼の射程距離内に居る彼女（しかも類稀れな女性）を取逃したのでは、それが空洞化してしまうからである。勿論、前者と後者とは双方とも不可欠の相補的要因なのであって、一方が実現しなければ他方も同様の行程を辿ってしまう関係にある。

Uriah の上述の野望の内、「共同経営者への躍進」の方は、彼の狙い通りに運んだ。これは逆に言えば、彼の強烈な自我愛から照射される感染力に、元来が強靱さを殆ど欠如していた Mr. Wickfield が、時の経過につれて、それこそ骨の髄迄染上げられて完全に彼の玩物に転化させられてしまった事を意味している。と同時に、父親に忠実な Agnes を考えれば、一方の成就是他方のそれを連鎖反動的に惹起する筈であるし、事実、彼の彼女獲得の野望も後一步という所迄は行ったのだが、終局的には実現され得ず、空中の楼阁と化してしまったのだ。その達成を阻んだ障害の事を思った時に、主人公 David Copperfield に照明を当てねばならない事になる。何故なら、Agnes の言葉を借りると ‘I have loved you(David) all my life!’ (ch. LXII) という事態になって、Uriah と彼女との結婚は最初から実現不能であったから。

David は Wickfield 父娘とは異なって、生命力に満ちている人間的な人間であるから、Uriah にとっては、彼との最初の出会いより彼は抜き去り難い障害となって、彼を脅し続ける邪魔者だった。従って、必然的の道程として、彼と David との間には緊張感と圧迫感が横溢した心理戦争が、激しく且つ執拗に演じられることとなる。彼等が初めて出会うに至った時から、David が必要な教養を修得して17才位で Mr. Wickfield の許を辞して行く迄の期間は、両者とも未だ若年であるから大して問題にならない。David が退場していった後、Uriah は本性を現わして彼の主人とその娘に、彼等の邸宅に移住するなどして、勢威を振り出すが、Agnes との結婚を貫徹する上においては、青年期に入って来た David の存在は何といても不気味である。距離が離れてしまって消息が不明なだけに、尚更そうである。無理からぬ事だが、彼としては、Agnes がロンドンで暮している David に会いに出てくる毎に彼女に随伴して、執拗に彼等に付纏って彼等の一挙手一投足に至る迄、監視の瞳を凝らし続けざるを得ない訳である。そして、チャンスを見つけては David に探り針を入れたり、或いは彼の動きを封じ込めようと画策したりする為に、両者の間に一種の葛藤劇が持上ってくるのである。

‘You see I am only just emerging from my lowly station. I rest a good deal of hope on her observing how useful I am to her father……and how I smooth the way for him, and keep him straight. She’s so much attached to her father, Master Copperfield……that I think she may come, on his account, to be kind to me.’ (ch, XXV)

Uriah は彼の深謀遠慮の実相をかくの如く David に対し剝出しにする事によって、手出し無用と注意信号を発している訳なのである。David としては Agnes に ‘Don’t repel him. Don’t resent……what may be uncongenial to you in him……In any case, think first of papa and me!’ (ibid.) と懇請された手前もあって、相手の真意を確知しながらも切歯扼腕するばかりで如何ともし難く、それだけに心中に燃え上がる憎念の激しさは募って行くばかりだ。

The poker got into my dozing thoughts besides, and wouldn’t come out. I thought, between sleeping and waking, that it was still red hot, and I had snatched it out of the fire, and run him through the body. (ibid.)

彼が煩悶しているのを尻目に、Uriah は彼の魔力で主人父娘を完全に呪縛し得て、意のままに繰ることによって、彼の目算を着々と結実させていった。共同経営者(実質的には独裁者的な)にはなつたし、Mr. Wickfield の邸宅には住めるようになったしで、運命の歯車は好調に廻転している様子であった。しかも、その間目の上の瘤たる David の上には、彼の養母で支援者でもある aunt Betsy が破産するという大凶変が出来して、彼は彼女と Mr. Dick とを養うために大奮闘せねばならなくなって、自分の問題だけで手一杯になってしまった。かてて加えて、彼は Dora. Spenlow という無邪気で愛くるしい娘を熱烈に愛するようになって、遂には結婚までした。だから、Uriah にとっては、条件が最高度に良くなって、後は無理押しをせずに、悠然と実が熟成しきってポトリと落下する瞬間を待構えているだけで充分だったのである。だが、「九切の功を一簣に虧く」という格言通りに、最後の詰めを誤ってしまって、彼が営々と九分通り構築した築山が一挙に崩壊してしまったのである。彼を破滅の淵に追詰めた立役者になったのは、彼がその致命的弱点たる借金癖を挺子にして、書記に雇って走狗として使うつもりでいた Mr. Micawber である。詰り、経営者に申し上がったのはいいが、成上り者の悲しさで虚栄心の膨張が急速に過ぎて、(これは Mr. Wickfield が管財人として管理していた、依頼主の財産の横領と詐取を企てた点にも露呈している)、却って墓穴を掘る事になってしまったのである。

勿論、真の主導者は David に他ならない。彼が先述した事象に浸り切っているから、ほんと安堵の胸を撫で下ろしたのが間違いのもとだった。例えば、David は伯母の破産を知った時、彼が修業を積んでいる民法会館(Doctor’s Commons)の法律事務所の経営者の娘であるが故に、愛する Dora との結婚は御破算になってしまうのではないかと悶々として、次の如き夢を見る。

……now I was hopelessly endeavouring to get a licence to marry Dora, having nothing but one of Uriah Heep’s gloves to offer in exchange, which the whole Commons rejected……(ch, XXXV)

結婚許可証を交付して貰う為の謝礼として Uriah の手袋の片一方だけしか差出す事が出来ず

## Uriah Heep について

その為に結局それを取出来なかった、というこの夢は、David の意識の深層での Uriah のイメージの根の張り方の強固さを示している、と同時に、Dora との結婚に彼が覚える抑圧されてきた空疎感も投射されているのではないのか。Agnes との場合と違って、Dora との結婚の場合には Uriah が介入する必要は全く無いから、彼への抑制されて来た David の激しい憎念を勘定に入れても、彼が彼女との結婚に欠落感を無意識の内に覚えていた事は否定出来ないように思える。従って、結婚前からかくの如き状態であった、と想像される彼が Dora との結婚生活で 'The first mistaken impulse of an undisciplined heart' とか 'There can be no disparity in marriage, like unsuitability of mind and purpose' などといった後悔と自責の言葉を再三再四思い浮べるのは、当然の事なのであって、要するに、彼女は彼の魂の成長道程で、一度は罹って苦しまねばならなかった麻疹みたいな存在に過ぎない。

という事は、Uriah の Agnes への飽くなき懸想は所詮は実る筈は無かった、という事を示しているが、畢竟、これは、狭隘な彼の認識許容限界を越えた事実であったのだ。

以上の如き Uriah Heep という人間像、Agnes を廻っての彼と David との角逐などは、作者の如何なる心象の反映像なのであろうか。最も集約的な形でこの問いに対する解答のヒントを与えるのは、'I am shown Two Interesting Penitents' と題する第61章である。この章においては、Creakle, Littimer, Uriah Heep といった本篇における主要な悪役連が一堂に会している。Creakle は刑務所長でもある治安判事 (magistrate) として。Littimer と Heep はその刑務所の模範囚として。今や一流作家となってその刑務所を訪れた David の前に讚美歌集を読みながら Uriah が現われて、「貴方は昔私を殴った事がありますね」などと言った後、次のように言い出す。

'But I forgive you,' said Uriah, making his forgiving nature the most subject of a most impious and awful parallel, which I shall not record. 'I forgive everybody. It would ill become me to bear malice. I freely forgive you, and I hope you'll curb your passions in future. I hope Mr. W. repent, and Miss W., and all of that sinful lot. You've been visited with affliction, and I hope it may do you good; but you'd better come here. Mr. W. had better come here, and Miss W. too.'

結局横領、詐欺の悪事が命取りとなって Mr. W. の許を追払われた後、'Fraud on the Bank of England' を企てた罪を問われて臭い飯を食う羽目に陥った Uriah が、David に向けて「改悛の情」を希求した有難い説教を一席講じているこの場面には、言う迄もなく、彼を何処迄も救いようのない極悪人に仕立てあげて懲らしめてやろうという David の抑圧され続けて来た欲望がまざまざと、投射されている。これは、裏を返せば、彼の自己正当化への凄まじい執念、即ち、A. O. J. Cockshut の言葉を借用するなら、'disingenuous self-justification, thirsting for vengeance' (*The Imagination of Charles Dickens*, P. 126) をありありと物語ってものだが、これは同時に Dickens 自身の心情を映し出しているものである事は明白である。メモに断片的に書き残されているこの場面についての言及からも、彼のそうした情念は察知せられよう。

Uriah Heep “a Pet Prisoner”—continually singing hymns and exhorting everybody who visits him—regarded as a model Penitent—but quite true to himself and exactly the same infernal scoundrel as ever.

His Mother’ ditto. Never were people so “umble.” NO. change that. Let him profess to be converting her.

(J. Butt & K Tillotson, *Dickens at Work*, P. 172)

中でも特に ‘the same infernal scoundrel’ という表現、或いは ‘No. change that.’ などに、最後の最後まで Uriah を謙虚さの仮面を部厚く被った卑下慢に誂え上げよう、という強固な意志を汲みとれるように思うが、そこに彼の情念を端的に観取することが出来よう。それにしても、オックスフォード版で 900 頁に垂んとする頁数を誇る長大篇で巻末に至る迄、動揺の色もなく同一の心的軌跡を描き続けた彼の執拗極まる固執力には、正直な所、舌を巻かざるを得ない。尤も、それだけの必然的、背景的事情の存在していた事も見逃せない所である。

Dickens の、少年時代の、債務弁済不能の為、彼を徐く他の全家族は債務者監獄に収監され、一方、彼自身は学校を止めさせられて、自分の口は自前で糊せよ、と両親によって靴墨工場へ 4 ケ月間働きに出された、惨めな体験、或いは、青年時代の、*Pickwick Papers* で大人気を博して一躍人気作家として世に出る迄の数年間、国会の速記者をやったり、法律事務所の書記を勤めたりした、苦節の日々（この時代に Maria Beadnell という初恋の相手に、身分の不安定さと将来性の欠如の為に捨てられる、という事件が持ち上がった）などは、今や伝説化さえ成されて、余りにも有名である。亦、彼に終生払拭し切れなかった程の屈辱感を植え付けたこれらの体験が、本篇の主人公 David Copperfield の人生行路の上へ、虚構化され変質されてはいるものの、David をいびる Murdstone 姉弟、或いは、彼等によって母親の死後 ‘Murdstone and Grinby’s warehouse’ へ働きに出されて (Mr. Murdstone は彼の義父である)、悶々としている彼自身のイメージとなって、巨大で底知れぬ不気味な影を濃く落しているのも、周知の事実である。これらの事象全体を通じて象徴的に浮彫りにされているのは、Dickens が、傷つき腕いている彼を微かにでも支えてくれる惻隠の情に、殆ど恵まれなかった、という事であろう。両親は全然頼りにならなかったし、恋愛には破れるしで、身近に居て彼の深傷をそっと柔らかく覆ってくれるような情愛には、熱烈に希求したけれども、彼は不幸にも出合わなかった。それでは、Maria Beadnell との恋愛が失敗に帰した後、殆ど間を置かずに結婚した Catherine Hogarth よりそれが得られたかという、これも又彼の希望に反する結果となってしまった。これは先述した Dora との結婚を悔い出した David の姿に、反映されている。(E. Johnson, *Charles Dickens*, P. 689) 詰まり、作家としての、或いはその他の諸分野における、目覚ましく多彩な活躍とは裏腹に、私人たる彼は、内側から彼を支えてくれる筈の愛情の欠落感に重く深く悩まされていたのである。普通人なら押潰されてしまいそうな幾重もの責め苦の厳重な桎梏を必死に振解いて、これを乗越えて、各方面で偉大な足跡を残した Dickens の人生は、感動的である。だが、その反面、苦闘の道程が、元々が情動の揺れの振幅が極度に大きく激しかった彼の内面を、絶え間のないうねりの波状攻撃でもって、不可測な程度に迄歪曲して、補填操作として、彼の意識の内奥に「ナルシズム」的病根を芽生えさせ、巢食わせるに至らしめたのも、否定出来そうもない明らかな事実である。それは定説となっている、数多くの友人達が Carlyle, Thackeray 等二、三の人間を除いて、人間的にはさして傑出していなかった、という事実に、明確な輪郭をとって露呈されているように思える。というのは、ナルシズム的傾斜を秘めた人間にとっては、彼が、彼よ

## Uriah Heep について

りも何らかの意味で上位にある人間を友人として選択するなどという自殺に等しい行為を錯覚的にでも仕出かす、というのは、生命の鼓動が継続している限りは、最も歓迎すべからざる事だから。

以上の叙述を念頭に置いて、本小説を見詰めた時に、少しく納得のいかない形象を認めることになる。即ち、作者の分身的存在たる *David Copperfield* の人間性にである。彼の人生には作者自身の暗うつさに満ちている人生体験が影を落しているのだから、彼自身も、少・青年期には物心両面に渡って随分と窮境にも陥って、苦しみと屈辱感に激しく苛まれるのであり、そして、それを何とか切抜けて作家として大成功を修める経過そのものは、*Dickens* のそれに酷似している。だが、暗影に付纏われたにしては、*David* の性格は殆ど不動で、終始一貫賢明で親切で同情心の厚い人物として描かれている。これは少し不合理なのではないか、という疑問が、どうしたって湧いてくる訳なのであるが、その理由は語らずして明らかであろう。即ち、ここで *Uriah Heep* という人物像のもつ意味、機能が顕現化してくるのである。

一人称体で統一された自伝的体裁をとった *David Copperfield* だけに、行ない易いという要因もあったろうし、40前という年令で創作力が最も油が乗っていたという要因も、或いは *J. Forster* が指摘しているように、彼の生涯の中ではこの時期が ‘his happiest years’ (*Charles Dickens*, *Dent*, p. 740) であったという要因も加味して良いだろう、これらの諸要因を推進力として、*Dickens* は一度は是非とも剔抉しておかなければならなかった心中に沈積している、凝着している、苦りというか膿というか、何かそうした嫌忌すべきものを剔出して、*Uriah Heep* という悪性的ナルシシストのイメージに凝集させたのだと、私には思える。逆に言えば、*David* という影像は自分の誇りとすべき要素を結集させて、彼が1869年に出版された本篇の序に記したように、彼の ‘favourite child’ として世に送り出したのだ、と言えよう。当時の変に倫理的な時代風潮を考慮に入れ、彼としても所有したくない要素だけに、*Uriah Heep* を徹底的に非人間的人間に仕立てあげたのであろうが、その叙述に付随せる執拗さは、これを抜きにしては成立しそうもない。こう見てくると、*Uriah* をして、作者の熱烈な願望の所産たる *Agnes* に執着させているのも、それを *David* などが阻止して彼を思う存分制裁するのも、こうしたカタルシスが収まって静穏な日々に戻った時に *David* と *Agnes* とが遂に結ばれる、と言うのも、納得出来る事である。

それともう一つ考えられるのは、誰からも愛されることなく、全く孤立した *Uriah* は独力で第52章で糾弾される迄は、「ナルシシズム」精神を大いに発揮して、周囲の身分的には上位の人間達を散々苦しめるが、これには、*Dickens* がやろうにもやれずに彼の内に抑圧されてきた社会への復讐といったものが秘められているように感じられる、という事である。勿論、よく指摘されるように、肉体的にも、精神的にも嫌悪すべき要素で充満している *Uriah Heep* という人物の創造行為自体にも、それが発動されているのは、当然の事である。

だから、複雑に屈折した過程を経て醸成されて作者が産出しただけに *Uriah Heep* の強烈にして、極めて潑刺としている個性は、当然成るべくして成ったものなのである。

付記、作品からの引用は *The Illustrated Oxford Dickens edition* に拠った事と、ナルシシズム関係の叙述の大半は、フロム著「悪とは何か」(鈴木重吉訳、紀伊国屋)に負っている事とを、お断りしておきたい。

(福岡：第一外国語学科 助手)



## AN ESSAY ON URIAH HEEP

*Akio Shinoda*

After bearing up against the successive humiliating experiences through his boyhood and youth till he made his *début* as a popular writer in "Pickwick Papers," Charles Dickens had been running up a ladder of success with lively steps; and it is "David Copperfield," his half-autobiography, that at the point of reaching the very pinnacle of worldly success, he produced composedly, remembering his following a thorny path in his younger days. Therefore, it may be said as a matter of course that the whole of the novel is gently coloured by 'tranquil brightness.' But this remark only explains the garment enveloping this book. I should say that we ought not overlook the fact that a sensation of resistance as compensation singularly expanded in the mind of Dickens, as natural results of his keen sensibility receiving an incurable severe wound from great hardships in his boyhood, and that it casts its gigantic shadow on all of his works including this book.

In "David Copperfield," it seems to me that the author's anti-social sentiment rises to the surface more distinctly than the other books, for it is incarnated through his rare mental condition like beautiful St. Martin's summer. And Uriah Heep is an image which was shaped through the process of this being condensed. He has a stubborn hostile feeling against the world arising from his extreme self-love, that is, 'vicious narcissism.' On his above-mentioned mental attitude steadfastly constructed from the miserable experiences in his boyhood, the image of the author's same one is thrown; and accordingly, the more diabolical he grows, the more frantically the author's hidden desire to revenge blazes.

Nevertheless, Dickens's fiery sentiment as this is destined to be suppressed by force, for where symmetry or harmony is disturbed art never crystallizes. Such being the case, Uriah Heep, furious as he is, is finally left out in the cold as a barnacle. I infer that after all he is only invested with the function as an object of the author's intense satire and hatred, from the following matter: David Copperfield, a hero of this book, who is the author's alter ego and a model of diligence and sincerity, gives a crushing defeat to Uriah in gradually capturing Agnes Wickfield, the mirror of virtue, by his enchantment. And at the same time it sounds natural to me that the wild passions whirling around inside the too much vigorous author gush out into the tone of the descriptions of him as stated above.

(Instructor, Department of the first foreign Language)